

令和元年6月5日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02815

研究課題名(和文) 日本語学習者によるコロケーションの習得過程 - 概念形成理論を援用して -

研究課題名(英文) Acquisition of Collocations in Japanese by Japanese Language Learners

研究代表者

大神 智春 (Ohga, Chiharu)

九州大学・留学生センター・准教授

研究者番号：50403928

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では概念形成理論を使用し、日本語学習者のコロケーションの意味習得について1)「典型化(プロトタイプ形成)」、2)「一般化(多義性理解)」、3)「差異化」(類義性理解)の観点から研究を行った。

その結果次の点が明らかになった。1)上位レベル・下位レベルともに日本語母語話者とも日本の大学に在籍する中国人留学生とも異なるプロトタイプを形成しつつある、2)日本語レベルが高くなるにつれてプロトタイプの用法から周辺の用法へと理解は広がるが、各用法の理解度にはばらつきが見られる。3)「とる」の類義語と言っても様々な性質のものがおりそのタイプによって理解度が異なる。理解できる共起語には偏りが見られる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

1)本研究は、日本語教育におけるコロケーション習得研究ではまだ殆ど行われていないコロケーションの意味習得に焦点を当てた点に特色があり、コロケーションに関する概念形成過程の一部を解明した点に学術的意義がある。また、日本語教育においてはコロケーション習得過程を発達的に捉えた研究がまだあまり行われておらず、本研究で学習者の発達の側面を明らかにすることができた点にも学術的意義があると言える。

2)現在、日本語語彙学習教材を開発しつつあるが、本研究の成果を開発教材に盛り込むことで、学習者の実情に合わせた教材作成が可能となり、学習効果が上がることが期待できる。

研究成果の概要(英文)： This paper studies how the meaning of collocations is acquired by Japanese language learners from the perspective of (1) “typicalization” (forming a prototype); (2) “generalization” (understanding the multiple meanings of a polysemous word); and (3) “differentiation” (understanding of synonymities) using the theory of concept formation.

The findings of the study can be summarized as follows: (1) the prototypes formed by both the higher and lower level learners are different from those of Japanese native speakers as well as Chinese students studying in Japanese universities; (2) learners tend to widen their understanding of polysemous words from the prototypical to the peripheral uses as their level of proficiency advances, but the level of comprehension of each usage varies; and (3) the synonyms of the verb exhibit diverse properties, and the level of comprehension varies depending on the type of synonym.

研究分野：日本語教育、第二言語習得

キーワード：プロトタイプ 独自性 多義性理解 偏り 類義性理解 語彙ネットワーク

### 1. 研究開始当初の背景

日本語の語彙学習に関しては、中級レベル以上になるとコロケーションの理解と使用が重要な項目の1つとなる(加納 2000)。コロケーションとは「慣習によってまとまって使われる語の連鎖」を指し(大曾・滝沢 2003)、連語とも呼ばれる。母語話者はコロケーションも含む定型表現を数千以上メンタルレキシコンに蓄積しているため迅速かつ正確に言語を処理することができるのに対し(Pawley and Syder 1983)、学習者にはその蓄積がないため、言語処理に負担がかかり、かつ、言語の「自然さ」に欠けることが多い(李 2011)。コロケーションの習得は語彙学習において重要な項目の1つであり、コロケーション習得メカニズムの解明が急務となっている。しかし、日本語におけるコロケーション習得研究はまだ十分に行われていないとは言えない。

Tanaka(1987)は語彙習得を 語彙間構造、

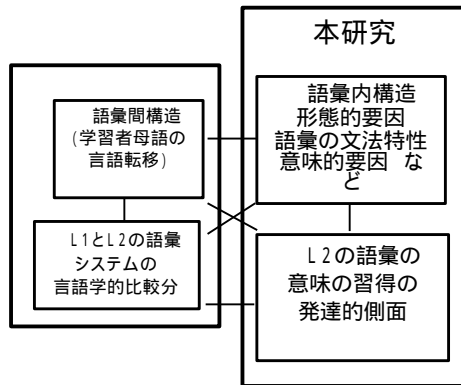


図1 語彙習得理論の視点(Tanaka 1987に基づく)

語彙内構造、第一言語と第二言語の語彙システムの言語学的比較分析、第二言語の語彙の意味の習得の発達の側面から複合的に捉える必要があると述べている(図1)。「語彙間構造」とは主に学習者母語の言語転移を指し、現在に至るまで多数の研究が行われている(Kellerman 1979, Granger 1998, Naesselhalf 2003, 曹・仁科 2006, 岡嶋 2010, 小森他 2012 など)。「第一言語と第二言語の語彙システムの言語学的比較分析」は対照言語学の領域である。

「語彙内構造」に関するコロケーション習得研究については、先行研究ではコーパスを利用した量的研究が主に行われており、コロケーションをどれだけ多く正確に知っているかという量的な側面からの研究が多い

(杉浦 2001、曹他 2006 など)。しかし、1つの多義語で形成される様々なコロケーションの意味や使い方をどれだけ深く理解しどのようにして使用できるようになるかについての研究は管見の限りない。

「第二言語の語彙の意味の習得の発達の側面」については、コロケーション習得研究においては学習者の誤用を横断的に比較・分析したものが多く(杉浦・朴 2003、大曾・滝沢 2003、曹・仁科 2006 など)、縦断的に習得の発達過程を調査したものはあまりない。

### 2. 研究の目的

上記の研究背景をもとに、本研究では、「1つの多義語で形成される様々なコロケーションをどのように理解し使用するか、それは発達過程においてどのように変化するか」を明らかにすることを目的とする。

単独の語の意味習得研究においては概念形成理論がよく用いられる。松田(2000)では、単独の語の意味習得は必ずしも「プロトタイプの意味」から「非プロトタイプの意味」に進むわけではなく「プロトタイプの意味」の習得に留まる可能性があるかと推察している。コロケーション習得研究においては概念形成理論を援用した研究はまだありなされていないが、1つの多義語の中心義的な語義で形成されるコロケーションから派生義で形成されるコロケーションの習得を俯瞰する上で当該理論を応用することが可能であると考えられる。

そこで、本研究では松田(2000)が用いた概念形成理論を援用し、概念形成理論の枠組みである「典型化」「一般化」「差異化」の観点から調査・分析を行う。具体的には以下の研究課題を設定する。

- 典型化：学習者が考える「とる」の「プロトタイプ」はどのようなものであるか。
- 一般化：多義的な意味を持つ中心語で形成されるコロケーションをどの程度理解しているか。
- 差異化：意味的に関連した表現との使い分けについてどの程度理解しているか。
- 上記 ~ は学習レベルによりどのように変化するか。学習者のレベルが高くなるにつれどのように意味理解が進むか発達の観点から習得過程を探る。

尚、日本語母語話者にも同様の調査を実施し学習者の調査結果と比較することで、学習者が形成する概念の特徴をより正確に把握することを目指す。

### 3. 研究の方法

#### (1)調査対象語

動詞の中でも和語動詞のコロケーションに関する学習者の誤用が多く指摘されていることから(大曾・滝沢 2003)、本研究では和語動詞「とる」を調査対象語とした。「とる」は初級前半で導入されどの学習者も知っている語である点、意味が広く上級に至るまで学習しない語義もある点、意味整理についての先行研究が充実している点が選定理由である。

尚、本研究では「とる」の語義を国広（1997）の分類に従い語義1（把握）、語義2（獲得）、語義3（離脱）、語義4（受入）、語義5（選択）、語義6（生産）、語義7（情報獲得）、語義8（占有）、語義9（動作）の9つに分類した。

### (2)調査課題作成

上記研究の目的で述べた研究課題について、田中（1990）および松田（2000）を参考に調査課題を作成した。

典型化：文産出課題

一般化：フレーズ性判断課題

差異化：フレーズ性判断課題、語産出課題

上記 ~

### (3)被験者

大神・清水（2011）より、初級レベルではコロケーションの認知能力が十分に発達していないことが確認されていることから、今回は中級レベル以上の中国語母語者を対象とした。また、フレーズ性判断課題において高得点を得た40名を上位群、得点の低かった40名を下位群として分析を行った。

## 4. 研究成果

### (1)典型化

文産出課題では、学習者に最も基本的だと考える「とる」の語義を用いて文を作成させ、どの語義による文が産出されたか、上位3語義を表1と表2にまとめた。

表1 上位群が考える「とる」の最も基本的な語義

語義	回答数(人)	%
6(生産)	13	34.2
2(獲得)	9	23.7
1(把握)	7	18.4

表2 下位群が考える「とる」の最も基本的な語義

語義	回答数(人)	%
6(生産)	12	35.3
2(獲得)	8	23.5
1(把握)	6	17.7

上位群でも下位群でも最も多く産出されたのは語義6(生産)で、語義2(獲得)と語義1(把握)が次に続いた。語義6において産出された共起語は上位群でも下位群でも「写真」が最も多かった。「写真をとる」は初級の前半で導入される表現であるが、学習初期段階で学んだ表現が上位レベルに至るまで典型事例として「とる」の概念の中心となっていることが分かる。

一方、日本語母語話者については、殆どの被験者が語義1「把握」をプロトタイプであると捉えていた。このことから中国の大学に在籍する学習者は日本語母語話者とは異なり独自のプロトタイプを形成しつつあると考えられる。

尚、日本の大学に在籍する中国人留学生に同様の調査を実施したところ、中国人留学生が最も多く産出したのは語義2であった。日本に在籍する中国人留学生も日本語母語話者とは異なる語義を中心的な語義であると考えていることが分かる。

中国と日本の大学に在籍する中国語母語話者は両者とも日本語母語話者とは異なる語義を中心に据え独自の概念を形成しつつあることが今回の調査で明らかになった。また、同じ中国語を母語に持つ学習者でも調査地により典型的だと感じる語義に違いがあったことから、プロトタイプ形成に関しては学習環境や生活環境が大きく影響していることが明らかになった。

### (2)一般化

上位群及び下位群における「とる」の9つの用法の理解度を測定するためフレーズ性判断課題を実施し、上位群・下位群別に各用法の平均点、正答率、標準偏差を算出した。また上位群・下位群の各用法における平均点について反復測定による分散分析を行ったところ、両群とも主効果が統計的に有意であった。そこでより詳細な検討を行うため単純対比による比較を行った。これらの統計処理の結果、上位群・下位群ともに、習得が進んでいる用法から習得が遅れている用法までを次のように分類することができた(図2、図3)

上位群も下位群も同様に用法2(獲得)と用法6(産出)の理解度が高く、また、理解度別に3つの語義グループに分けることができたが、下位群と比較して上位群の方が当然ながら習得が進んだ語義が多い。一方、用法3(離脱)と用法9(動作)は上位レベルになっても9つの用法の中では理解度が低いことが分かる。

用法3は「とる」が持つ用法の1つとして認識されにくいのではないかと考えられる。そのため他の習得が進んだ用法に比べ習得が遅れるのではないかと考えられる。用法9はイディオム的な表現であり日常的な使用頻度も低いことから習得が進みにくいと考えられる。

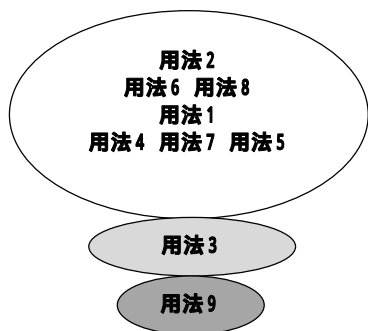


図2 理解度別語義グループ(上位群)

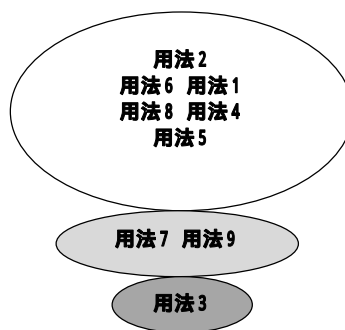


図3 理解度別語義グループ(下位群)

尚、下位群では用法3の理解度が最も低いのに対し上位群では用法9の理解度が最も低かった。この点は共起語想起の難易度が関係しているのではないかと考えられる。用法9は慣用句に近い表現である。仮に「相撲をとる」という表現を学んだとしても「空手」や「柔道」と共起するわけではなく、その他の共起語を想起することが困難である。用法3も用法9も同様に教科書で扱われる機会が少ないが、共起語を広げる上での難易度の違いが両者の習得の進度に影響していると考えられる。

この結果から、コロケーション習得に影響を与える要因としては、日本国外での日本語習得においては教科書も含めた学習環境や生活環境の影響だけでなく、コロケーションの性質、即ち共起語をどれだけ想起しやすいかが関係していることが明らかになった。

### (3) 差異化

差異化では「とる」の9語義のうち多くの辞書で第一義とされている「把握」とその派生義とされる「獲得」を調査対象とした。「とる」の類義語としては類義語辞典の1つ目の見出しにある語を選択し、語義1「把握」に対しては類義語「持つ」、語義2「獲得」に対しては「得る」を選定した。そして、「とる」を「把握」の意味で使用すると適切となるコロケーション(G1)、「とる」では不自然なコロケーション(「持つ」で適切となる)(G1)、「とる」の「獲得」の意味で形成されるコロケーション(G2)、「とる」では不自然なコロケーション(「得る」で適切となる)(G2)の4種類のグループに区分した。そして各グループ3問ずつからなるフレーズ性判断課題を作成し実施した。

まず、G1・G1の使い分けとG2・G2の使い分けをどの程度理解しているか、レベル別に正答率を産出しt検定を行った(表3)。

表3 類義語の使い分け(学年別)

グループ	下位群 (N=40)			上位群 (N=40)		
	正答率	標準偏差	t検定	正答率	標準偏差	t検定
G1	86.67%	0.34	**	86.67%	0.34	*
G1	46.67%	0.50		72.50%	0.45	
G2	80.00%	0.40	**	85.83%	0.35	**
G2	28.33%	0.45		35.00%	0.48	

G1とG2は両群とも正答率が80%以上であったことから、下位レベルの段階で「とる」の適切な共起語の習得が進むと考えられる。一方、G2は両群とも正答率が低いことから、上位レベルでも習得が進んでいないことが分かる。「とる」と「得る」のように意味領域の区別が難しい類義語の習得は困難であると言える。G1では、下位群に対し上位群の正答率が有意に高かった。このことから、下位レベルではG1とG1のように意味領域が明確に異なる類義語の習得もまだ進まないが、上位レベルになると類義語の使い分けが進みつつあることが分かる。

次に、提示された不適切なコロケーションを見て、被験者は適切な動詞を産出することができるか調査した(表4、表5)。

表 4 G1 における動詞の産出

	G1 (「持つ」が適切)	
	産出語	回答数
下位群 (N=20)	持つ	18
	無回答	2
上位群 (N=31)	持つ	30
	する	1

表 5 G2 における動詞の産出

	G2 (「得る」が適切)	
	産出語	回答数
下位群 (N=20)	得る	5
	もらう	4
	受ける	2
	入れる	4
	入る	1
	手に入れる	1
	無回答	3
上位群 (N=31)	得る	22
	獲得する	1
	もらう	2
	ある	3
	身につける	1
	とる	2

下位群は各動詞の共起語は習得するが共起しない語との使い分けまでは習得が進んでいないことが分かる。上位群になると当該語および類義語とそれぞれ共起する語の習得が進む。しかし、当該語と類義語の使い分けはまだ不十分であることから、差異化はまだ発展途上であると考えられる。特に語と語のネットワーク知識が充実していないと言える。

#### (4) 結論

本研究の結果をまとめる。今回、学習者のコロケーション習得について次の点が明らかになった。

##### 「典型化」

中国で日本語を勉強する学習者は日本語母語話者とも日本の大学に在籍する中国人留学生とも異なる独自のプロトタイプを形成していることが明らかになった。プロトタイプの形成には学習環境や生活環境が大きく影響していると考えられる。

##### 「一般化」

下位群から上位群になるにつれ、プロトタイプ的な用法だけではなく周辺の用法へと理解が深まりつつあるが、両群内では語義の理解度にばらつきがあることが明らかになった。また、コロケーション習得に影響を与える要因としては、日本語習得においては教科書も含めた学習環境や生活環境の影響だけでなく、共起語をどれだけ想起しやすいかが関係していることが示唆された。

##### 「差異化」

学習者は調査対象語及び類義語がそれぞれどの名詞と共起するかは習得しているが、どの名詞が「共起しないか」についての知識は発展途上であり、語と語のネットワーク形成がまだ十分ではないことが明らかになった。

#### (5) 今後の課題

先行研究も本研究もヲ格を持つ動詞 1 語を調査対象語とするに留まっており、他の性質を持つ多義語についてはどのように習得が進むかについて検証していない。今後は更に多様な動詞を対象に調査を行う必要がある。

先行研究でも本研究でも、学習者が実際に調査対象語についてどのようなコロケーションを使用しているかその使用実態までは明らかにしていない。しかし「どのようなコロケーションを産出できるか」は学習者が構築する中間言語の重要な一側面であり、学習者の産出面も加えた分析・考察が必要である。

## 5. 主な発表論文等

### <論文>

- (1) 大神智春・郭俊海(2018)「中国人学習者による多義語コロケーションの習得 レベル別の学習者の比較から」『第12回国際日本語教育及び日本研究シンポジウム予稿集』(CD予稿集 A-4)
- (2) 大神智春(2018)「類義語で形成されるコロケーションの理解と使い分け - 中国語母語話者を対象として - 」『日本語教育方法研究会誌』24(1) pp.70-71 DOI: 10.19022/jlem.24.2\_70
- (3) 大神智春(2017)「多義動詞を中心語とするコロケーションの習得」『日本語教育』166号 pp.47-61 DOI: 10.20721/nihongokyoiku.166.0\_47

### <発表>

- (1) OHGA, C. (2019) The Acquisition of Some Collocations within the Polysemous Verb Constructions by Chinese Learners of Japanese - A Comparative Analysis Based on Learners' Proficiency. 第2回九州大学女性研究者 ダイバーシティシンポジウム
- (3) 大神智春(2018)「類義語で形成されるコロケーションの理解と使い分け - 中国語母語話者を対象として - 」日本語教育方法研究会
- (2) 大神智春・郭俊海(2018)「中国人学習者による多義語コロケーションの習得 レベル別の学習者の比較から」第12回国際日本語教育及び日本研究シンポジウム

〔雑誌論文〕(計 3件)

〔学会発表〕(計 3件)

## 6. 研究組織

### (1)研究分担者

研究分担者氏名：郭 俊海

ローマ字氏名：Guo Junhai

所属研究機関名：九州大学

部局名：留学生センター

職名：教授

研究者番号(8桁): 20377203

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。